

# 幼児期における自然体験の効果に関する実証的研究(1)

## —教育実習生からみた自然体験—

杉村伸一郎 山崎 晃 財満由美子 林 よし恵  
松本 信吾 三宅 瑞穂 菅田 直江 落合さゆり

### 1. 問題と目的

幼稚園教育要領でも述べられているように、自然体験を通して感情や思考など様々な側面が発達すると考えられ、これまで多様な実践が行われてきた。

附属幼稚園でも、平成9年と10年に「幼児と自然とのかかわりを見つめる」という研究主題のもと研究をすすめ、幼児にとっての自然の意味と保育者の援助のあり方について検討してきた(広島大学附属幼稚園, 1997, 1998)。そして、平成16年度に新たに編成した教育課程の中に、自然を通じた教育をさらに盛り込むべく、本年度より「幼児の自然体験について考える ～森の幼稚園構想に向けて～」をテーマに掲げて研究を開始した。

しかしながら現時点では、子どもが自然にふれたりかかわったりすることにより、どのような体験が生じ、何が育まれるのかが組織的に明らかにされておらず、自然体験の効果すら実証されていない。

そこで本年度は3年計画の1年目として、教育実習生を対象に、実習期間中の自然体験を尋ねるとともに、実習前後で自然体験の重要性に関する認識が変化するかどうかを検討する。

ここで、教育実習生を対象としたのは、彼らが今後、教育の職に就き、実際に幼児・児童と接しながら指導していく立場にあるからである。附属幼稚園のこれまでの研究において、幼児の豊かな自然とのかかわりを育むためには、指導援助をしていく保育者の自然観が大きく影響することが示唆されている(広島大学附属幼稚園, 1998)。したがって、実習生の自然観や幼児期の自然体験などを把握することにより、より適切な実習指導が可能になると考えられる。

また、教育実習生は、子どもと保育者の中間にあたる年齢であり、保育者に比べると、子どもに近い感性で自然を体験しているとともに、自分の子ども時代の

体験の記憶も鮮明であると考えられる。そして、体験内容の言語化や評価も子どもに比べ容易に行える。そこで、教育実習生からみた自然体験を調べることにより、これまでの保育者中心の見方を比較・検討することが可能になり、幼児期における自然体験やそこでの援助に関する新たな側面の発見が期待できる。

### 2. 方法

**調査対象** 対象は広島大学に在籍し、附属幼稚園で教育実習を受けた4年生32名(21歳から23歳、平均年齢21.5歳、男性7名、女性25名)であった。

**調査時期** 教育実習の期間は2006年5月29日から6月9日で、実習開始前に事前調査を、終了後に事後調査を実施した。

**質問紙の内容** 自然体験を、「動物や植物とのかかわり、様々な自然物とのふれあい、自然事象との出会い」と定義した上で、事前調査では下記のことを尋ねた。

(1) 幼児期の自然体験は子どもの発達にとって重要だと思いますか？(非常に重要、重要、やや重要、どちらともいえない、あまり重要でない、重要でない、全く重要でない、の7件法)。

(2) 上の判断の理由(自由記述)。

(3) 現在の子どもの自然体験は十分だと思いますか？(附属園の子どもではなく一般的な子どもを想定して回答、非常に十分、十分、やや十分、どちらともいえない、あまり十分でない、十分でない、全く十分でない、の7件法)。

(4) あなた自身は自然体験がどの程度あったと思いますか？(非常に多かった、多かった、やや多かった、ふつう、あまりなかった、ほとんどなかった、全くなかった、の7件法)。

(5) ご自身の自然体験で特に印象に残っていることを、時期なども含めて具体的に書いてください。

(6) 上記のことが特に印象に残っている理由。

(7) 自然体験を通してしか学べないことがあると思いますか。あるとすれば、その内容と理由を書いてください。

(8) 自然という言葉からイメージする名詞や形容詞を、できるだけ多く書いてください。

さらに、事後調査では事前調査の(1), (3)に加えて、実習を通して幼児期の自然体験の重要性に対する考え方は変化したか否か(変化した場合は、その内容と理由)、所属園の子どもの自然体験は十分か、実習期間中の自然体験で特に印象に残っていることとその理由、自分自身で実習期間中に自然体験がどの程度あったか、実習期間中に自分自身の幼児期の自然体験で思い出したこと、保育者として子どもにどのような自然体験をさせたいか、を尋ねた。

### 3. 結果

事前と事後の各質問における度数分布を求めるとともに、「非常に重要」(非常に十分, 非常に多かった)を1点, 「全く重要でない」(全く十分でない, 全くなかった)を7点として、各質問項目における平均値と標準偏差を算出した。

**幼児期の自然体験の重要性** 「幼児期の自然体験は子どもの発達にとって重要だと思いますか?」という質問に対する回答の結果を、教育実習の前後に分けて表1に示した。

表1からわかるように、実習前から8割近くの学生が、幼児期の自然体験は子どもの発達にとって「非常に重要」だと考えており、「どちらともいえない」から「全く重要でない」を選択した学生はいなかった。

また、幼児期の自然体験の重要性についての判断理由に関する自由記述においては、「生きていく上でとても大切なことが学べる」「生涯必要となり得る知識につながっていく」など、具体的ではないが自然の中でしか学べないことに対する理由と「感性」「健康な体力」「美しさ」「楽しさ」「怖さ」「好奇心」など具体的に育

まれる力や感覚を理由としてあげている学生がほぼ同数いた。後者の中では、感性や命の尊さをあげている学生が複数いた。

少数意見ではあるが、「自分の経験から楽しさや面白さが心に残っている」「土の感触、葉の手触りを覚えている」など、重要性の理由として自分の体験を基にした記述は興味深い。

実習前後の違いを検討するために、重要度の平均値を算出すると、実習前の平均値(標準偏差)は1.25(0.51)、実習後は1.06(0.25)であり、 $t$ 検定を行ったところ、実習後の方が重要性の判断が高くなる傾向がみられた( $t = 1.98, df = 31, p = .06$ )。そこで、実習前後の変化を詳細に調べたところ、実習前後で変化しなかった者が25名(非常に重要が24名, 重要が1名)、重要度が上がった者が6名(実習前に「重要」と回答した5名と「やや重要」と回答した1名が、実習後には「非常に重要」と回答)、下がった者が1名であった(「非常に重要」から「重要」に変化)。

また、実習後に実施した、「実習を通して、幼児期の自然体験の重要性に対する考え方は変化しましたか。変化した場合は、その内容と理由を記述してください」という質問に対する回答を検討したところ、変化したと答えた学生が23名(71.9%)、変化しなかったと答えた学生が9名(28.1%)であった。

以下、変化した場合の内容と理由に関して、まず、実際に重要度が変化した場合の例を挙げる。「子どもが自然の中でさまざまな気づき・発見を目を輝かせながらしている姿を見て、自然体験の重要さをより一層強く感じました」「生きものが自分たちと同じように生きているということが体験を通してしか実感をもって学べないと感じた」「自然を通して学べることは多いなと思ったから」「実際に子どもが葉っぱの変化や山の中での環境の変化の様子を感じとっている様子を目のあたりにしたから」「子ども達が山で楽しく遊ぶ様子、青虫が蝶に羽化したときの子どもの感嘆、蝶やカナヘビを大事にしているのに意外にやさしく扱う方法を知らない様子を見たから」

次に、重要度の評定は変化しないが、考え方が変化した場合の理由を示す。「子ども達は、実際に、昆虫や、うさぎなどを飼うことによって、生きるということを実感できているのだと思う。特に、うさぎを抱きながら、うさぎのあたたかさを感じて、生きているからあったかいんだよ、と言う発言が印象に残っています」「虫を捕まえることで達成感を味わったり、さなぎがちょうちよに羽化する様子を見ることで心を躍らせたり、そういったかわりの中で、子どもたちの心の豊かさを育むことにつながっていたことから」「自然から学べ

表1 幼児期の自然体験の重要度

教育実習前	度数	%
(1) 非常に重要	25	78.1
(2) 重要	6	18.8
(3) やや重要	1	3.1
教育実習後	度数	%
(1) 非常に重要	30	93.8
(2) 重要	2	6.2
(3) やや重要	0	0

ることは生と死ぐらいしか思いついていなかったが、その他にももっとたくさんの方が学べると思うようになった。自然体験を通して友だち同士の関わりが出てくる、といった子どもたちの実際の姿を見てそのようになるようになった」

**現在の子どもたちの自然体験** 「現在の子どもたちの自然体験は十分だと思いますか?」という質問に対する回答結果を、教育実習の前後に分けて表2に示した。

表2から、実習の前後とも、現在の子どもたちの自然体験が「非常に十分」や「十分」と思う学生は存在せず、多くの学生が「あまり十分でない」と思っていることがわかる。実習前に比べて実習後は、「どちらともいえない」を選択した学生が4名少なくなっているが、実習前の平均値(標準偏差)は4.97(0.80)、実習後は5.09(0.69)で、*t*検定を行ったところ有意な変化はみられず、実習前後の相関も、0.72と有意に高かった(*p* < .01)。

次に、実習後に、「附属園の子どもたちの自然体験は十分だと思いますか?」と尋ねた結果を集計し、表3に示した。

表3から、附属園の子どもたちの自然体験に関しては、「非常に十分」もしくは「十分」と思っている学生が8割近くおり、現在の子どもたちの自然体験では、「非常に十分」もしくは「十分」と思っている学生が存在しなかったという結果と対照的であった。回答を得点化すると、平均値(標準偏差)は2.03(0.82)で、実習後

表2 現在の子どもたちの自然体験

教育実習前	度数	%
(1) 非常に十分	0	0
(2) 十分	0	0
(3) やや十分	1	3.2
(4) どちらともいえない	7	22.6
(5) あまり十分でない	15	48.4
(6) 十分でない	8	25.8
(7) 全く十分でない	0	0
教育実習後	度数	%
(1) 非常に十分	0	0
(2) 十分	0	0
(3) やや十分	1	3.1
(4) どちらともいえない	3	9.4
(5) あまり十分でない	20	62.5
(6) 十分でない	8	25.0
(7) 全く十分でない	0	0

(注) 実習前は(4)と(5)の両方に○印を付けた1名を除外したので、全体で31名である。

に尋ねた現在の子どもたちの自然体験の平均値の5.09(0.69)と比較すると、附属園の子どもたちの自然体験はより豊かであると思われることが明らかになった(*t* = 16.10, *df* = 31, *p* < .01)。

**自分自身の自然体験** 実習前に「あなた自身は自然体験がどの程度あったと思いますか?」と尋ねたところ、表4のような結果であった。

自分自身の自然体験に関しては、9割が「ふつう」以上で、「あまりなかった」と回答した学生は、3名だけであった。ちなみに、「非常に多かった」を1点、「全くなかった」を7点とし、平均値を求めたところ、平均値(標準偏差)は2.69(1.18)であった。

次に、過去の自然体験の程度が、幼児期の自然体験の重要性や現在の子どもたちの自然体験が十分かどうかの判断と関係があるか否かを検討するために、それぞれの回答を得点化し相関係数を算出したところ、重要性は.189、十分かどうかは.094でいずれも有意ではなく、関係が無いことが示唆された。

自身の自然体験で特に印象に残っていることに関する自由記述を分析したところ、幼児期は、家族との体験が印象深く、時期も春と夏に限られている傾向が見られた。幼稚園で印象深かったこととしては、砂場遊びや草花を使ったままごとがあげられていた。可塑性のある素材が幼児の遊びに適し、その中で豊かに楽しい経験をしていることが窺える。小学校では、友だち

表3 附属園の子どもたちの自然体験

	度数	%
(1) 非常に十分	8	25.0
(2) 十分	17	53.1
(3) やや十分	5	15.6
(4) どちらともいえない	2	6.3
(5) あまり十分でない	0	0
(6) 十分でない	0	0
(7) 全く十分でない	0	0

表4 自分自身の自然体験

	度数	%
(1) 非常に多かった	5	15.6
(2) 多かった	10	31.3
(3) やや多かった	10	31.3
(4) ふつう	4	12.5
(5) あまりなかった	3	9.4
(6) ほとんどなかった	0	0
(7) 全くなかった	0	0

表5 自分自身の実習期間中の自然体験

	度数	%
(1) 非常に多かった	6	19.4
(2) 多かった	14	45.2
(3) やや多かった	7	22.6
(4) ふつう	2	6.5
(5) あまりなかった	2	6.5
(6) ほとんどなかった	0	0
(7) 全くなかった	0	0

(注) 無回答の者が1名いたため全体で31名である。

と田植え、稲刈り、プール(川遊び)などの体験を多くあげ、学校帰りの野原や小川などの道草も印象深かったこととして記述されていて、自然体験は予想したより豊富であった。

また、以上の自然体験が印象に残っている理由としては、実際に見て動いた経験から学んでいる。その経験の中に、楽しさや喜びを感じることができたから、ということが多くあげられていた。その要因としては、この学年は小学校低学年時にゆとり教育の必要性が協議され生活科が導入された世代であることが反映していると思われ、生活科の中で校外に出かけ、自然とふれ合う経験が多く取り入れられたためと推察される。

さらに、「自然体験を通してしか学べないことがあると思いますか。あるとすれば、その内容と理由を書いてください」という問いに対しては、「あると思う」と全員が答えている。内容としては、自然とのふれ合いの中で育まれる豊かな心。自然事象への理解。食物連鎖。環境破壊。人間と自然との共生。身体の動かし方や感じ方、などがあげられ、自然についての知識というよりも自然を受け入れ自然からの気づきや理解を示しているように思われた。理由としては、「百聞は一見に如かず」で自然の中で遊ぶことや自然体験をすることが大事であるという記述が大半であり、自然体験を好意的にとらえている。

最後に、「自然という言葉からイメージする名詞や形容詞を、できるだけ多く書いてください」という課題に対する回答をまとめたところ、名詞、形容詞、共に豊富に記述されていた。名詞では生き物、山、森、太陽、季節、植物、災害など自然事象や自然物に関する記述が多く、少数として不思議、雄大、生命、神秘などが記述されていた。これは、自然に対してのイメージの名詞=知識としてのとらえが学生にはあると思われる。しかし、形容詞の欄では、安らぎ、美しい、静けさ、驚き、楽しい、すばらしい、面白い、気持ちいい、思うようにならない、大きい、澄んだ、豊か、心地よい、のびのび、などと、自由に感じ表現している。このことによっても、自然は、知ることでより豊かに感じるものであることがとらえられた。

**自分自身の実習期間中の自然体験** 実習後に、「あなた自身、実習期間中に自然体験がどの程度あったと思いますか?」と尋ねたところ、表5のような結果であった。この結果は、附属園の子どもの自然体験の度数の分布と類似しており、「あまりなかった」と回答した2名以外は、「ふつう」以上である。得点化し、平均値を求めたところ、平均値(標準偏差)は2.35(1.08)であった。

次に、自分自身の実習期間中の自然体験の程度が、

幼児期の自然体験の重要性に対する考え方に影響を及ぼしたか否かを検討するために、「実習を通して、幼児期の自然体験の重要性に対する考え方は変化しましたか」という質問に対して、変化したと答えた22名と、変化しなかったと答えた9名の実習期間中の自然体験の程度の平均値を算出した。その結果、変化有群の平均値(標準偏差)は、2.32(0.99)、変化無群は、2.44(1.33)であり、*t*検定を行ったところ有意差はなかった。

また、自分自身の実習期間中の自然体験の程度が、現在の子どもや附属園の子どもの自然体験が十分かどうかの判断と関係があるか否かを検討するために、それぞれの回答を得点化し相関係数を算出したところ、現在の子どもは.104、附属園の子どもは.390で、後者のみ5%水準で有意であり、自分自身の実習期間中の自然体験が多いほど、附属園の子どもの自然体験が十分であると思う傾向があることが明らかになった。

さらに、4歳児クラスに配属になった教育実習生12名に関して、実習期間中の自然体験の程度別に、実習期間中の自然体験で特に印象に残っていることとその理由をまとめ、表6に示した。印象に残った自然体験としては、①さなぎからチョウへ羽化し飛び立つ変化の瞬間をとらえたこと、②ウサギや青虫などの生き物に触れ、柔らかさ、温かさを実感し驚いたこと、③カナヘビなどの生き物と自分なりにかかわり、子どもたちが集って目を輝かせを心を動かしている様子、④繰り返し水や砂などの自然素材とかかわり遊ぶ姿、⑤山を散策し自然素材の遊具や様々な動植物とかかわり触れ合ったこと、⑥裸足で陰と日向の温度差を体感する子どもの姿などあげられていた。

印象に残った理由として、①生まれて初めて体験したこと、②誕生などの生命の神秘にふれたこと、③成長や変化の瞬間をとらえられたことに自身が感動したこと、④実際に体験すること(さわってみてはじめてわかった)、⑤自分の過去の体験を思いだし重ねること、⑥じっくり見たり聞いたりする機会を持ったこと、

表6 実習期間中の自然体験の程度別にみた実習期間中の自然体験で特に印象に残っていることとその理由

実習期間中の自然体験	特に印象に残っていること	その理由
非常に多かった (3名)	蝶が羽を広げ飛び立つ瞬間を目の当たりにしたこと	・羽化した時の子どもの目の輝きがとても印象的だったから
	蝶が飛んでいったこと	・さなぎから蝶になり飛び立つという成長を見ることができたから
	子どもたちとカナヘビを探しているときにシマヘビを見つけ、子どもと一緒に触らせてもらったこと	・自分もどきどきしたが、そのときの子どもたちの顔が印象的だった ・自然（ヘビ）を介して子どもたちの不安や興奮、好奇心に満ちた顔を見ることができたため ・幼い頃、初めてヘビに直面したときのことを思い出した
多かった (1名)	男の子がカナヘビにはまっていたこと	・同じものに何人も子どもがずっと興味を持っていることに驚いたから
	砂場で水路を作って遊んだこと 水鉄砲で遊んだこと 青虫がさなぎになり蝶へ羽化したこと	・子どもたちの表情がいきいきしており、楽しそうだった ・繰り返し遊んでいたり、1日中その遊びをしていたから ・その遊びのことがずっと子どもたちの頭の中に残っていたから（子どもその遊びのことが頭に残ってなかなか次の活動に行くことができない子どももいた）
	モンシロチョウのさなぎが蝶になっており目の前で飛び立ったこと	・蝶になったときの感動と、飛び立つ瞬間を見れたことへの感動があったから
やや多かった (5名)	ザリガニが脱皮したこと	・ザリガニの脱皮なんて見たこともないし実際に触れてみると柔らかかったという感触が残っているから ・子どもたちのきらきら輝く笑顔と感動してやまない表情、歓声が今も焼き付いて離れないから ・自分も初めての体験で、感動した
	日陰と日向の温度差を、子どもがはだしになることで実感できた時の驚いた様子	記述なし
	うさぎを抱きながら、うさぎの温かさを感じて「生きているからあたたかいんだよ」という子どもの発言	・子どもたちは実際に、昆虫やウサギを飼うことによって、生きるということを実感できているのだと思う
	みんな虫取りが大好きだった 放っておいても蝶など動くものを自分自身で見つけ「つかまえない！」とおもっていたこと	・保育者がわざわざ遊び場を提供しなくても、（自然の中で）子どもは自分自身で目的を見つけているなど感じたから ・幼稚園自体がそのような環境になっていることは、あたりまえに感じそうだが大切なことだと感じたから
	裏山に散策しに行ったこと 虫もいれば動物もいる アスレチックもあること	・環境が楽しそう ・様々な動植物と触れ合えたから ・普段何気なく見ているものでも、じっくりと見たり触れたりすることが新鮮だった
	ふつう (3名)	モンシロチョウがさなぎから羽化したところが見られたこと モンシロチョウを10匹ほど保育室に放し飛ぶ姿を子どもたちと見たこと
蝶が羽化して飛び立つ場面		・初めて見たシーンでもあり、一緒に見ている子どもたちの表情がなんとなくきらきらしていたように見えたから
青虫のやわらかさ 虫の多さ		・触ってみてわかったから

(注) この表は4歳児クラスに配属になった教育実習生12名分の結果である。

が自身の体験として挙げられている。

また子どもの様子から、①子どもの表情や歓声などの感動表現に心を動かされたり、②体験の中で表した子どもの言葉や気づきをとらえたこと、③子どもの興味が継続し繰り返しかかわる姿を見て、自然環境が子どもの能動性を高めていることや、④子ども自身がじっくり見たり聞いたりする経験をしているのに気づいたこと、が挙げられていた。このように強い印象として残った出来事は、子どもの様子から客観的に推察して印象を持った内容もあったが、直接見たり触れての実体験や子どもと臨んだ場での感動体験に強い印象をもったことが多く記されていた。

**自然体験やその認識に関する性差** 最後に、以上の質問項目における回答に関して、性差の有無を検討したところ、幼児期の自然体験の重要度においてのみ1%水準で有意差がみられ、男性の平均値が1.0と7名全員が「非常に重要」と回答したのに対して、女性25名の平均値（標準偏差）は、1.32（0.56）であった。自然に関する知識に関しては、林・田尻（2006）が、ニワトリなどの生物を描写させると、男子学生の方が女子学生よりも正解率が高いことを報告しており、その結果から、自然体験の質的な性差を想定している。しかし、本研究においては、自然体験の程度などに関して、性差は認められなかった。

#### 4. 考察

**幼児期の自然体験の重要性** 本研究では、実習前から8割近くの学生が、幼児期の自然体験は子どもの発達にとって「非常に重要」だと考えていた。鈴木（2006）は、短期大学の2回生102名に、「自然と触れ合うことについて」を「かなり重要」から「全く重要でない」の5段階で尋ねた。その結果、「かなり重要」と答えた学生は10名、「少し重要」が25名、「重要」が15名、「あまり重要でない」が41名、「全く重要でない」が7名で、回答無しが4名であった。これは、質問内容や回答の選択肢の違いがあるにせよ、本研究と全く異なる結果である。本研究での対象者が、自然体験を重視している幼稚園に教育実習で配属され、そこで質問紙が実施されたために、「非常に重要」という回答が増えた可能性も考えられるが、それだけでは十分に説明がつかないと思えないので、今後、異なる実習校でも調査し、比較検討する必要がある。

さらに本研究では、実習後の方が重要性の判断が高くなる傾向がみられた。重要度の評定では、実習前後で変化した者は7名だけであったが、実習を通して幼児期の自然体験の重要性に対する考え方が変化したかを尋ねたところ、変化したと答えた学生が23名

（71.9%）も存在した。評定の方は、先にも述べたように、実習前から8割近くの学生が幼児期の自然体験は「非常に重要」だと回答したために、天井効果で、実習後の変化を十分に捉えられなかった可能性が高い。

今後、評定方法を改善しなくてはならないが、その際には、自由記述でみられた変化のきっかけをうまく捉えるように工夫したい。例えば、「子どもが自然の中でさまざまな気づき・発見を目を輝かせながらしている姿を見て」「環境の変化の様子を感じとっている様子を目のあたりに」という記述にみられるような自然に対する子どもの感受性や気づきに、実習生がどのように目を向けていき自分の自然体験に対する考え方を変えていくのだろうか。また、「蝶やカナヘビを大事にしているのに意外にやさしく扱う方法を知らない様子を見たから」というような、子どもが自然体験とおして自然とのかかわり方を学んでいくことの発見や、自然体験を通して生と死を学ぶだけでなく、心の豊かさを育んだり、友だち同士のかかわりが生じたり、というような自然体験の広がりに対する気づきは、どのようにして起きるのだろうか。今後はこのような変化をうまく測定していきたい。

**子どもと自分自身の自然体験** 現在の子どもの自然体験が「非常に十分」や「十分」と思う学生は存在せず、多くの学生が「あまり十分でない」と思っていた。そして、この評定は、実習前後で変化しなかった。しかし、附属園の子どもの自然体験に関しては、「非常に十分」もしくは「十分」と思っている学生が8割近くおり、現在の一般的な子どもの自然体験の結果と対照的で、附属園の子どもの自然体験はより豊かであると思われていた。

確かに、附属園の自然環境は、これ以上のものを望む必要がないほど恵まれていると思われる。しかしながら、「非常に十分」な自然環境が「非常に十分」な自然体験に直接に結びつくのではなく、その間には、保育や教育という営みが介在している。したがって、今後は、カリキュラムなども含めて、総合的に子どもの自然体験を捉えていく必要があるだろう。

また、自分自身の自然体験に関しては、9割が「ふつう」以上で、全体的に多い傾向があった。このような過去の自然体験の程度が、幼児期の自然体験の重要性や現在の子どもの自然体験が十分かどうかの判断と関係があるか否かを検討したところ、どちらも関係が無いことが示唆された。さらに、自分自身の実習期間中の自然体験の程度は、これまでの自然体験よりも、「多かった」という回答の割合が高かったが、幼児期の自然体験の重要性に対する考え方に影響を及ぼしたか否かを検討したところ関係がみられなかった。また、自

分自身の実習期間中の自然体験の程度が、現在の子どもや附属園の子どもの自然体験が十分かどうかの判断と関係があるか否かを検討したところ、実習期間中の自然体験が多いほど、附属園の子どもの自然体験が十分であると思う傾向があることが明らかになった。

自分自身の実習期間中の自然体験が多いほど、附属園の子どもの自然体験が十分であると思うのは、自然体験が多い学生ほど、子どもと自然体験を共有する時間が多かったり、共有はしていなくても、自然に対する感受性が高いために子どもの自然体験に気づきやすかったりしたことが原因ではないかと考えられる。もしそうであれば、教育実習や保育・教育の効果を上げるためには、このような学生の個人差を行動や認知レベルで分析して、自発的に気づきにくい学生や保育者にどのように指導すればよいかを検討してもよいであろう。また、全体的に、幼児期の自然体験の重要度との関係がみられなかったのは、重要度の評定の平均が高すぎたことにも原因があると考えられるので、今後引き続き検討していくべきであろう。

**自然体験と実習中の保育態度** 最後に、年長クラスに配属された教育実習生12名の自由記述を用いて、自然体験と実習中の保育態度との関連について、結果をまとめ考察を加える。まず、事前調査の自然という言葉からイメージする名詞や形容詞の自由記述を集計したところ、そこで記述された言葉の数は、1個から26個と、実習生によってかなりの幅があった（平均値は13.5）。そこで、平均値より多くの言葉をイメージした上位群と、少なかった下位群とを比較すると、上位群は実習中の幼児とのかかわりにおいて、自然体験を通じた幼児とのかかわりが多かったのに対して、下位群は保育室でのかかわりや、かかわらずに見ているだけのことが多かった。

また、事後調査での質問項目、「保育者として子どもにどのような自然体験をさせたいか」は、保護者の自然観そのものを尋ねる内容となっているが、下位群の記述は「田植え」「泥遊び」「羽化の瞬間」など、実習中に経験した体験、具体的な活動にとどまっているのに対して、上位群では「植物動物に直接触れ、命を感じる経験」「人間以外にも様々な生き物がいるということを感じる経験」など、意味を伴った経験レベルの記述が多くなされていた。また、自然という言葉からイメージする名詞や形容詞において、自然のイメージを「怖い」「恐ろしい」と表現していた学生は、保育者として子どもにどのような自然体験をさせたいかにおいて、「自然には危ない面もあるのだということがわかる経験」という記述をしていた。

以上の結果から、次のことが示唆される。事前調査

において示された自然という言葉からイメージされる言葉の数は、その個人の自然観の大きさを示していると考えられる。これは、幼児期も含めた現在までの自然体験を通して、個人に蓄積されたものが表現されたと考えるからである。豊かな自然体験を経験した者は、より多くの言葉をイメージできたのではないだろうか。そして、大きな自然観をもつ学生は、幼児とのかかわりにおいて、自然とかかわる方向での援助を多く行う傾向が見られた。それは、保育者として子どもにどのような自然体験をさせたいかという質問において、幼児にとって大切だと思われる経験を、きちんと文章化して示していることとも関連しているであろう。顕著に表れていたのは、自然の怖さをはじめからイメージしていた学生の例である。この実習中には、自然の怖さを感じるような経験はなかったと思われるが、その経験の大切さをあげている。逆に、自然観の乏しい学生は、実習中に実際に自分が経験したことを、幼児期の大切な経験と位置づける傾向が見られた。これらことから、教師が多くの体験を通して大きな自然観をもっていることが、幼児の自然とのかかわりを支える上で重要であることが示唆される。自然観の広がりがあればあるほど、幼児と響き合う自然体験が増えると考えられる。

以上で述べてきた今回の調査結果から、教育実習生の自然体験の量や質を測定するのに、自然という言葉からイメージする名詞や形容詞の自由記述という方法が、自然体験の程度の評定や自然体験の内容の自由記述に比べて、有効であることが示唆された。しかし、今年度の実習生だけでは十分な対象者数が確保できなかったため、来年度以降も調査を継続して対象者数を増やし、先に述べたようなイメージ上位群と下位群との実習中の保育態度の違いを検討していきたい。その際には、実習前だけでなく実習後にも同様の調査を実施し、実習中には実習生の保育態度を観察や調査により客観的に把握するとともに、分析においては、自分自身の自然体験の箇所を考察したような、名詞と形容詞の質的な違い等を考慮する必要があるだろう。

## 引用文献

- 林幸治・田尻由美子 2006 「自然とかかわる保育」  
の実践的保育指導力の男女差について 日本保育学会第59回大会発表論文集, 980-981.  
広島大学附属幼稚園 1997 幼児教育研究紀要 第19巻  
広島大学附属幼稚園 1998 幼児教育研究紀要 第20巻  
鈴木えり子 2006 自然体験の現状と課題 ―保育者志望の学生の実態― 日本保育学会第59回大会発表論文集, 1006-1007.